

その1、植物としてのたばことコロンブス以前、癒しとしてのタバコ

植物としてのタバコはナス科タバコ属60種の一つで、現在の主な栽培種はニコチアナタバクム（いわゆるタバコのこと）の一品種です。

ナス科は主に熱帯、亜熱帯に分布し、代表的な有用作物としてはナス、ジャガイモ、トマト、トウガラシ、タバコがあります。

ナス科85属のうち40属がアメリカ大陸原産です。

すなわち、コロンブス以後、いわゆる大航海時代の始まりと拡大に沿ってジャガイモ、トマト、ドウガラシ、タバコは伴に世界にデビューし、またたくまに広がり、当時一番はっぴこにあった日本にも50年またずに知られ、たばこにいたっては100年後には栽培されるようになっていました。

種は非常に小さくて30万粒で約28gの重さしかありません。

1年生の草木で2mくらいまで育ちます。

葉は長さ70cm、幅40cmくらいになり、一株で20~25枚収穫されます。

原産地は南米アンデス山脈の標高2000から3000mの高原地帯でポリビア南部からアルゼンチン北部と推定されています。

南北アメリカでは、神の薬として重要視され、シャーマンにより儀式用に、又万能薬として、さらに人間関係のつなぎ役として様々に利用されていました。

彼等先住民は既に、考えうるあらゆるタバコの使用法を知っていました。

吸う、噛む、飲む、嗅ぐ、浣腸の5形態です。

浣腸とはいささか驚きですが、マヤ、インカ、アズテクの人々を始めタバコによる浣腸（薬剤の一種として使用）は南北アメリカ大陸でみられたようです。

又、吸うといっても儀式などでは煙を吹き掛けるといったこともしていたようです。長さが70cm位太さが手首位の巨大葉巻に火を付け、その煙を少年が200人位の大人に吹き掛けて回り、大人達は両手で口と鼻の回りを覆って吹き掛けられた煙を息の続く限り吸い込み、あたかも自ら祝福しているようであったそう。

ただ中南米は葉巻が多く、北米はパイプによる喫煙がメインというように、地域で主な利用法に特徴があり、このことが後にヨーロッパに伝わった時に影響しています。すなわち北アメリカへ行ったイギリスではパイプ、中南米へ向かったスペインでは葉巻というぐあいに。

その2、世界への登場 みなさんご存じのコロンブスです。

1492年10月15日 一束の乾燥した葉がコロンブスに贈物として差し出されました。

その当時は、金を目指してインドへ着いたと思っていたコロンブスにとっては乾燥した葉はなんの感心もなかったようです。

そして、一ヶ月後、キューバ内陸の探査から帰った部下から、インディアンが葉を吹かしているのを目撃したという報告を受け取りました。

その後コロンブスに続く多くの航海者や水夫達が様々な形でタバコを見、経験し、そのすばらしさに母国に持ち帰って急速に広がっていきました。特に、ヨーロッパでは新世界の植物を貴金属と同等の経済的資産と認識していた為、とりわけ薬用植物が重視されました。

1571年に表された、スペインはセビリヤの内科医ニコラスーモナルデスの新世界の薬草誌の第2部にタバコは20以上の病気（ガンから歯痛まで）を治すことができ、空腹や渴きを低減することも強調しています。

当時のヨーロッパの医学認識レベルに合致した理解であった為、それから200年ほどはタバコ治療は常識として通用してしまっただろうな。

一方では、医療に役立つよりなにより、楽しみとしてのタバコはすでに広まっており1570年頃にはロンドンでパイプの製造が始まっていた。

当時砂糖、チョコレート、コーヒー、茶等のエキゾチックな産物がまず社会の上層に受け入れられ次第に下層へ広まっていったのに対し、タバコはいきなりヨーロッパのあらゆる社会層に同時に受け入れられたようです。

加えて、アメリカ大陸では北から南までタバコを使っていたため、新大陸へ向かったスペイン、ポルトガル、イギリス、フランスの航海者達があらゆるところで、タバコに接したということがヨーロッパ内に一挙に広まる要因とされています。

そして、大航海時代の流れに沿い、アジア、中近東、アフリカへと一気に広がっています。

1557年にはスペイン人がフィリピンへタバコを持ち込み栽培を始めています。

一方ポルトガル人は拠点のマカオからアジアへと、タバコは植民地へ交易品として一方、植民地経営にとって最も高価な換金作物として導入されました。

その尖兵となっていたのが宣教師であり、皆さんご存知のフランシスコザビエルが1549年鹿児島へ上陸した時、一緒にいたポルトガル人がタバコを燻らせていたそうです。この時は葉巻だったようです。

「南蛮人は腹の中で火をたいとる！」と日本人は驚いたとか。

これが日本にタバコがやってきた最初かもしれません、コロンブスがタバコと出会ってから50年めでした。

たばこ一口ばなし、その1

タバコという名称について

コロンブスがたどり着いた西インド諸島では宗教儀式（c o h o b a）に使用されていた。

Y字型の二股パイプを t a b o c c o と呼んでいたそうです。その為、タバコのことを、スペイン語ポルトガル語で t a b a c c o というようになったのが最初。

17世紀のイギリスの文献に t a b a c c o と書かれており、いつのまにか英語では t o b a c c o となりイタリアでは t a b a c c o, フランスでは t a b a c, オランダでは t a b a k, デンマークでは t o b a k, アラビア語では t a b g h, インドネシアでは t e m p a k a u, と殆ど変化せず伝わっています。

日本では煙草、柁波古、多葉古、多葉粉、延命草、長命草、おもい草、等々。

中国では、煙火、煙花、煙草、金糸草、返魂煙、相思草、坦不帰、愛敬草、淡婆姑、等々。

たばこ一口ばなし、その2



嗅ぎタバコしか知らなかったナポレオン、ある日パイプを献上されたが吸い方がわからない。いろいろやったがどうもわからない、嗅ぎタバコしかやったことがないナポレオンにとって、吸うということがわからず、ただ口をパクパクするばかり。

みかねた部下が「スーッと吸うんです」と言いました。

さすが負けず嫌いのナポレオン、それならばと、思いっきり吸ったものの。吸ったら煙を出すという事を知らないもんで、そのまま胃袋へ。

いきなりナポレオンは、はげしくむせながら鼻の穴からモクモクと煙を。「なんだ！こんなもの捨ててしまへ。余は胃袋はひっくり返ってしまったぞ！」その後ナポレオンは嗅ぎタバコ以外のタバコには手を出さなかったとか。

たばこ一口ばなし、その3

当時貴族の間では煙を出さない嗅ぎタバコが大流行。

かのマリーアントワネットはお嫁入り道具に52個のそれは見事な嗅ぎタバコ入れを持っていきました。

この嗅ぎタバコ入れは何年も前ですがNHK TVで放映されていました、七宝やガラス、当時の最高の技術を駆使した工芸品といわれるタバコでした。

近くでは、中国は清朝、西太后等の嗅ぎタバコ入れ（鼻烟壺）を、台湾の古宮博物館でたくさん見ることができます。これらもなかなかの工芸品です。

次回はタバコの構造や種類についてお話するよていです。

t o b e c o n t i n u e d . . .



参考文献

タバコの世界史	Jーグッドマン著	平凡社刊
朝日百貨	世界の植物	朝日新聞社刊
葉巻の世界	広見 譲 著	日東書院刊
たばこおもしろ	雑学辞典	講談社刊